モラエスの庭
—（５）モラエスの著作の位置づけと第五回内国勧業博覧会 —

宮崎隆義，石川榮作，佐藤征弥，境泉洋

徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部
〒770-8502　徳島市南常三島町1-1
E-mail: miyazaki.takayoshi@tokushima-u.ac.jp

Moraes's Garden
— (5) Writings in the Time and The 5th National Industrial Exhibition —

Takayoshi Miyazaki, Eisaku Ishikawa, Masaya Satoh, Motohiro Sakai

Institute of Socio-Arts and Sciences, Tokushima University
1-1 Minami Josanjima-cho, Tokushima, 770-8502, Japan
E-mail: miyazaki.takayoshi@tokushima-u.ac.jp

Abstract

This paper and report is based on the oral presentation delivered on 29th, November 2014, as part of Symposium 'Moraes in Kobe and Tokushima' held at the Faculty of Integrated Arts and Sciences, Tokushima University, in Tokushima. This is also part of the outcomes of the Project Studies by the activities in 2014 of Moraes's Studies Group launched on July 31, 2010.

The members of Moraes's Studies Group, T. Miyazaki (English Literature, Comparative Literature), E. Ishikawa (German Literature, Comparative Literature), M. Satoh (Plant Physiology), M. Sakai (Clinical Psychology), all at the Institute of Socio-Arts and Sciences, Tokushima University, have been continuing to try to analyze Moraes's works and to explore new facets of Moraes's biographical facts. Moraes was fascinated by the far-east Japan and fell in love with Ó-Yoné, who died young at the age of 39 in Kobe. After her death, Moraes decided to leave Kobe and live in Tokushima, which was Ó-Yoné's hometown. He lived with Ko-Haru, Ó-Yoné's niece, for a while until she died from tuberculosis at the age of 21. He led his life until his death in Tokushima for 16 years as a kind of hermit, neglecting his fame as the Consul General and Navy high-rank Officer of Portugal, and other financial merits entailed with the post.

Though Moraes is often regarded as a kind of hermit in Tokushima, we should pay more attention to and reevaluate his aspect of a diplomat and consul in Kobe days before coming to Tokushima. He was a very able diplomat and consul, and once actively involved with the 5th National Industrial Exhibition held in 1903. In Tokushima he wrote and published *O "Bon-odori„ em Tokushima* and afterwards *Ó-Yoné e Ko-haru*. These works might be regarded as based on the forms of diary and essay, seemingly as reports from Tokushima to Bento Carqueja, editor of *Comércio do Porto* (Porto Commercial Newspaper) in Portugal. Concerning these works as such there seems to be an undercurrent of the image of garden, or paradise, which is strongly connected with the Exhibition he was concerned. In this paper, a tentative reevaluation of his works in Tokushima and the undercurrent of the image of garden related with the 5th National Industrial Exhibition he was involved with in Kobe days.

Key Words: Wenceslau de Moraes, *O "Bon-odori„ em Tokushima*, *Ó-Yoné e Ko-haru*, Romanticism, garden, exhibition

１.はじめに

本研究は，徳島大学総合科学部学部長裁量経費・平成 26(2014)年度総合科学部創生研究プロジェクト「グローバリスムとモラエス―モラエスが世界に広げた〈徳島の自然・人・心〉の再構築―」及び平成 26 年度徳島大学パイロット事業支援プログラム(社会貢献事業)「徳島県・明治大学との連携によるモラエス顕彰事業の整備と充実」による研究成果の一部である。

本研究論文の目的は，プロジェクトの一環として開いている「徳島大学総合科学部モラエス研究会」の基本的な活動である例会・読書会での成果を基にして，モラエスの著作について新たな考察を加えることである。同時に，文人外交官モラエスの実像について新しい側面を見出し，グローバル化を迎えた現代において，徳島におけるモラエスの存在の意義を問い直しつつ，文化面で地方創生に寄与できるかを問うことも視野に入れている。

モラエスは，日本の日記文学，随筆文学に傾倒しながら,「随想」として徳島とそこに住む人々を眺め『徳島の盆踊り』(*O "Bon-odori" em Tokushima (Caderno de impressões intimas)*)を著しポルトガルの『ポルト商報』(*Comércio do Porto*)に連載発表した。しかしながら,「随想」の体裁を取り，日付の入った日記としての形も取り，同時にまた知人友人に宛てた書簡の側面と形式をも取っているこの作品は，結末部において彼が最初に意図していた「随想」とはかなり調子が変化していることがうかがわれる。モラエスがお手本のひとつとして参考にした紀貫之の『土佐日記』は，その根底には亡くした娘への想いが込められているが，同様に，自分の目で見た徳島とそこに住む人々を描きつつ，亡くしたおヨネへの想いが「随想」として込められたこの『徳島の盆踊り』，そしてその後の『おヨネとコハル』(*Ó-Yoné e Ko-haru*)には，異邦人としてのポルトガル人モラエスの視線の先に，生と死に対する思いがにじみ出ている。モラエスが実際に目にしたものに自分の「随想」を絡め被せる時,「実」から「虚」への転換がなされ，この「随想」としての『徳島の盆踊り』は，質的な変化をきたし,「虚」の部分において普遍化を成し遂げているといってよい。

前論文「モラエスの庭―(4)生へのまなざし，死へのまなざし―」では，平成 25 年 11 月 16 日に徳島大学総合科学部で開催した日本比較文学会第 49 回関西大会のシンポジウム「モラエスとハーン―生へのまなざし，死へのまなざし―」で口頭発表したものを再考し論じた。特に，異邦人であり疎外感を感じざるを得なかったモラエスが，ふたりの女性おヨネとコハルを看取った後も生きていかなければならない生を,そして老齢となり死を意識し始めた晩年に,生と対峙する死をどのように捉えていたのか考察した。

本論文では，モラエスの著作について，特に徳島における著作の『徳島の盆踊り』と『おヨネとコハル』について，その位置づけと評価を確認しておきたい[1]。また，モラエスは，神戸でポルトガル領事を務めていた時に1903年に催された第5回内国勧業博覧会に精力的に関与してポルトガルの物産を展示している。モラエスにとって「徳島」は「楽園」として目に映っていたことは前論文においてだけでなくこれまでにも論じているが，「楽園」の概念が具現化した「庭」とモラエスが関わった博覧会の共通点，並びに「楽園」のイメージと博覧会の要素が混在しているテーマパークを視野に入れつつその根底に潜んでいるものを論じたい。

２．モラエスの時代―その背景―

2010 年 7 月 31 日に「徳島大学総合科学部モラエス研究会」が発足し，現在に至るまで基本的な活動として例会・読書会を，ほぼ毎月 1 回のペースで実施している。モラエスについては，名前は聞いたことはあるが，実際に何をした人か，どういう人だったのかがこの徳島の地でもほとんど知られておらず,また忘れられようとしている。多少なりとも名前を聞いたことのある人は，おヨネとコハルと関連づけられていて，妻子がありながら日本で若い女性たちと関わった好色な異邦人というイメージしか持っていないようである。それが災いしてか，さらにモラエスの著作がポルトガル語で翻訳も少ないために,例えば，ラフカディオ・ハーンと比べても極めて知名度は低いと言わざるを得ない。

[1] 本論文は，平成 26 年 11 月 29 日に徳島大学総合科学部で開催した「「神戸と徳島のモラエス」シンポジウム」で口頭発表したものを基に再考加筆したものである。

モラエスが何をした人なのか，どんなものを書いたか，特に，大学機関として関わる以上やはりモラエスの書いたものを詳細に検討しながらその評価なり価値を発信してゆくことが重要であろう。モラエスの女性関係とか，そういうものはもうよしとして，モラエスがいかにすぐれた著作をしているか，またそもそもの海軍軍人として，その後の文人外交官として，また領事，総領事として，その仕事ぶりがいかにすぐれていたか，そのあたりに今後焦点を置いていかなければならない。2013年12月に，明治大学でシンポジウム「ポルトガルの文豪モラエスシンポジウム～「美しい日本」をこよなく愛した異邦人～」を開いており，その時と，モラエスの著作に対する見方が大幅に変わることはなく重複するところが多々あることはお断りしておく。

モラエスの著作についての評価と位置づけを検証する場合，モラエスがどういう時代の中で著作をしたのかということを確認することがやはり重要なことであろう。その当時，モラエスが生きていた 19 世紀の後半から 20 世紀の初めまで, いわゆる文学思潮の面では大きな転換が起こっていたということを念頭に置かなくてはならない。いわゆるロマン主義(Romanticism)，もしくはロマン主義復興(Romantic Revival)の時代と言われる時代から，リアリズムや自然主義の台頭，そして「意識の流れ」のような前衛的な手法が登場した 20 世紀の初めに至ってゆくということを考えると，そうした流れは決して単独に登場したものではなく，前のものを，前の時代のものを否定しつつも連綿とつながりつつ変化を示しているのであるし，また，それらが決して途絶えたり消えたりしているわけではない。

そうした消えることなく残っている，あるいは人々の心の中に潜在しているものとして，その当時は「遠いものへのあこがれ」というものがあったと考えてよかろう。それはロマン主義もしくはロマン主義復興のキーワードのようなもので，時間的には過去に向かうこと，それには古代文芸への関心，過去への関心，人間の成長にあっては幼年期への回顧といったような形で現れている。そして空間的には遠い国や異国への関心ということでアジアや極東，そして日本, ということが, 当時のヨーロッパの人々にとっては関心の的であったということになろう。また当時は産業革命が始まり物質主義に陥って，物質主義や拝金主義を嘆き，精神的なものを求める風潮も生まれている。そうした傾向は，当時の作家や小説たちがその作品に描き込んでいるのである。例えばウィリアム・ワーズワース(William Wordsworth, 1770-1850)はロマン主義(Romanticism)の宣言をした人物であると同時に，その詩創作の原理には，対象を取り上げて描くことによって，その対象によって昔の感動や感情を回顧するということが示されている。有名な水仙や虹を扱った詩などは，大人となった自分が子供の頃に見たときの感動や感情を，目にした水仙や虹によって想起するというものとなっているのである。そうしたロマン主義の根底に流れていたもの，あるいは流れているものは，20 世紀に登場した「意識の流れ」(stream of consciousness)の小説などにも実は根強く通底しているのである。

文芸の思潮は，必ずしも文芸の世界だけのものではないしまたその中にとどまっているものでもない。当時の哲学や科学の思想や発見などが影響を与え，席巻することもある。「遠いものへのあこがれ」は，物質主義や経済主導の政策とも結びついて，当時のヨーロッパの国々による植民地獲得競争となり，そういう意味での東洋への関心にすり替えられているのである。

また，その当時，1859 年にはダーウィンの『種の起源』(*The Origin of Species*, 1859)が発表され，いわゆる生物の進化論というものが登場している。これは大変な思想の転換であり，既成概念を否定してしまいキリスト教に真っ向から対抗して宗教裁判を引き起こしてしまうこととなる。神の姿に似せて作られ動物とは一線を画していた人間が，進化の過程で動物とつながっており動物に他ならないということをダーウィンが断言したのである。そのためにダーウィン自身，裁判にかけられ，法定に猿を連れてきてこれはお前の祖先かと問われたというエピソードが残っている。

進化論というものを，我々は当たり前のように受け入れているが，これは大変な思想の転換であったし今でも必ずしも全面的に受け入れられているわけではない。その進化論にはもうひとつ重要な点が潜んでおり，それは時間の意識，時間の流れ，特に直線的な時間の流れというものである。過去，現在，未来というように，ずっと時間が直線的に流れていくという捉え方であって，それは進化の系統樹が視

覚的に示している。時間を意識するということ，時間の流れを意識するということは，過去の意識，現在と過去との相対化につながっていく。実は，ロマン主義の中にその萌芽はあり，ワーズワースがサミュエル・T・コールリッジ(Samuel Taylor Coleridge, 1772-1834)とともに発表した『抒情民謡集』(*Lyrical Ballads*, 1798)の序文の中で，詩の創作原理として唱えたものは，現在の中に過去の感情を記憶によって浮かび上がらせ，過去と現在を相対化させることに他ならなかったのである[2]。目にした対象によって過去の感情が心の中に再現されるという捉え方は，その後現在に至るまで続くことになるといってよい。

過去を意識すること，現在の中に過去を留めるということは，肖像画の流行，そして近代に至っては写真の発明によって，肖像写真や家族写真，記念写真の流行につながっている。さらには映画の発明によって動画としても同様に過去が記録され，今日に至っているが，それは，流れる時間の中で過去を，過去の記憶を保存し固定化して永遠化すること，そしてそれが現在と相対化されるということである。

進化論の考え方は，博覧会ともひじょうに密接なつながりがあるが，それは直線的な時間の流れが展示という視覚的なものによって示されているのである。過去のものや現在のものを写真や動画，あるいは現物によって示しながら，同時に未来への時間の流れを暗示するものを同様に展示している。博覧会あるいはそれに類した展示や展覧会は，ある意味で時間の流れ，直線的な時間の流れの表出に他ならない。ダーウィンの『種の起源』が発表されたとほぼ同じ頃，1851 年には，ロンドンで第 1 回万国博覧会が開かれており，それは今だに回数を重ねて世界の各国で開かれている。第何回という，様々な会の回数も実は直線的な時間の流れの確認でもある。

モラエスの生きた時代がそういう時代であったということ，ロマン主義のなごりとして「遠いものへのあこがれ」，それからダーウィンの進化論で我々が意識の中に潜在させていた時間の意識，時間の流れ，直線的な時間の流れの意識が，文芸の世界ばかりでなく社会現象のひとつとして，例えば博覧会のようなものにもつながっていたということである。

３．モラエスの著作―『徳島の盆踊り』[3]，『おヨネとコハル』[4]―

モラエスの著作のひとつである『徳島の盆踊り』には括弧書きの副題として「内的随想記」が付せられている。そこの部分が，モラエスがなぜ徳島に来たのかということにも関わるのであるが，何もかも捨ててしまった「零」の状態，それを彼は理想の生活として考え，さらに「貧しく忘れ去られて」(188)という状態の生活をしたい，そして，質素な生活をしながら「過ぎ来し歳月の思い出を喚びさます」(188)ために徳島にやって来たということなのであろう。

その当時，ロマン主義の詩人として知られているワーズワースが理想の生活としたのは，「質素な生活と高邁な思索」(‘plain living and high thinking,’ Written in London, September 1802, l.9)というもので，当時の知的な人たちが理想とした生き方というものでもあった。その理想とする生き方，あるいは生活の考え方は，アメリカにわたって，ワーズワースと親交のあったエマソン(Ralph Waldo Emerson, 1803-1882)に受け継がれている。彼は「超絶主義」(Transcendentalism)ということを唱え，人間が自然と一体となることが大事である，ということを思想的に説いた。そしてそれを生活として実践したのが，ヘンリー・デイヴィッド・ソロー(Henry David Thoreau, 1817-1862)という人物であり，この人物はまさにモラエスと同じように，ウォールデン(Walden)というところで，森の中で隠棲のような生活をしてひとり静かに思索にふけったという人物である。

日本では鴨長明が，1212 年に『方丈記』を書いている。『方丈記』は英訳されて海外に紹介されるということになったが，もともとは南方熊楠の翻訳であ

[2] ‘I have said that poetry is the spontaneous overflow of powerful feelings: it takes its origin from emotion recollected in tranquillity: the emotion is contemplated till, by a species of reaction, the tranquillity gradually disappears, and an emotion, kindred to that which was before the subject of contemplation, is gradually produced, and does itself actually exist in the mind. In this mood successful composition generally begins, and in a mood similar to this it is carried on; but the emotion, of whatever kind, and in whatever degree, from various causes, is qualified by various pleasures, so that in describing any passions whatsoever, which are voluntarily described, the mind will, upon the whole, be in a state of enjoyment.’

[3] 『モラエスの日本随想記　徳島の盆踊り』(ことのは文庫，徳島：徳島県立文学書道館，2010 年 3 月) 。

[4] W. de Moraes, 岡村多希子訳，『おヨネとコハル』(東京：彩流社，1989 年) 。

ったにもかかわらず後に出版されたときには他の人の名前になっているが，その当時には「日本のソロー」ということで紹介されている[5]。モラエスは日本にあこがれ，日本を敬愛し，この鴨長明を理想として，ある意味で異国の異文化を取り入れようとしていたにもかかわらず，実は，彼が生きていた時代，ヨーロッパの知識人たちが理想としていた精神的な傾向，人々の潜在的な大きな流れであったものと根底ではつながっていたと捉えてよいであろう。

括弧書きの「内的随想記」は，原文では「ノート，日記」(caderno)であり，原文も日付を付した日記風の随筆となっている。モラエスは，それまでの著作においては小見出しを付けて見聞録の随筆といった体裁を取っているのに対して，この『徳島の盆踊り』では日記体の文章となっているのである。この点については，日記というものがどういうものであるかを考えるとモラエスの意図が推し量れるかもしれない。

本来，日記というものは，他人に読まれるということは想定していない。例えば，イギリスのサミュエル・ピープス(Samuel Pepys, 1633-1703) などは，事細かく日々の出来事，個人的なことなどを書き残しているが，人に読まれないように独自の暗号で書き記している。日記文学というジャンルがあるけれども，本来の日記というものはこのように，人には読まれることがない秘密のものであるということに対し，日記文学は，日記という秘密性を体裁として取りながら，秘密の共有という誘惑を基にした，人に読まれることを，読者を巻き込むことを想定もしくは意図したものなのであって，いかに個人的なものであったとしてもなにがしかの隠蔽と虚構性が存在することを前提としなくてはなるまい。

日本の私小説は，日本独特のものであると捉えられている傾向があるけれども，１人称の語り手という視点で捉えると，必ずしも日本独特のものではあるまい。18 世紀後半にイギリスで流行した，動物や物，例えば愛玩犬や古い外套を主人公として，それらに語らせるという小説などは[6]，日本の夏目漱石に大きな創作上のヒントを与えて，あの『我が輩は猫である』が生まれたということはよく知られている。語り手を誰にするか，あるいは何にするかによって作者の意図というものが大きく違ってくるのである。動物や物を語り手にすれば，非常に風刺性が強くなるが，「私」を語り手にすることは，意図的に内面を吐露することによって読者に対し秘密を暴露しつつ共感を求めようとするということがひとつの意図，目的となると考えてよいだろう。だが場合によっては，読者は語り手によって翻弄され語り手の策略によって騙りの世界へと導かれることもあり，それが信頼出来ない語り手という考え方にもつながっているのである。

日記というものの本質を，先に述べたダーウィンの進化論の基底にある時間の意識と関連づけて考えるとき，例えばドナルド・キーンは，日記をつけるということが「時間を温存することである」と述べている[7]。実はこれに類したことは我々も行っていることで，日記をつけたり，ブログを書いたり，記念写真を撮ったり，あるいは似顔絵や肖像画を書いてもらう，ネット上に記録を残す，ということをしているわけであるが，これは流れる時間を停止してその時の瞬間を留めるということである。

20 世紀になってフランスのプルースト(Marcel Proust, 1871-1922)は，その小説『失われた時を求めて』(*A la Recherche du Temps Perdu*)の中で，「時間から身をひいた存在の様々な断片」ということを述べている。つまり「断片」というもので記憶を呼び戻したい，そういうことをプルーストは小説を書くということで行ったわけである。「断片」は，いわば写真や肖像画，日記や覚え書きといったものと同じものであると考えてよかろう。

しかしながら，それと同じようなことを平安時代の日本の女性作家たちが，実は既に行っていたということである。プルーストが出るよりもずっと以前に，日本では，古くから，平安時代からあったのだということにドナルド・キーンは気づいたといってよいだろう。

そこで『徳島の盆踊り』を見てみると，先に述べたように，「内的印象記」ということで，日記の体裁を取りながら「印象」というものを『徳島の盆踊り』

[5] ‘A Japanese Thoreau of the Twelfth Century,’『南方熊楠全集第 10 巻』参照。

[6] ‘It-narratives’と呼ばれ，人間以外の動物や物を主人公，または語り手とする物語。

[7] 『百代の過客－日記に見る日本人（上・下）』(朝日選書 259, 260)，東京：朝日新聞社, 1987 年, pp.13-14.

の中に書いているのである。コハルが亡くなった後にモラエスは『おヨネとコハル』を執筆しているが，この作品も『徳島の盆踊り』の体裁をとどめつつ随筆的な印象を強く与えている。その序文の中でモラエスは「未来の文学は敬愛の文学であろう」と見通し,「夢と追慕に生きている哀愁の病気にかかっている人たち」と，自分を客観視しつつ読者を引き入れて「読者に，諸君自身の過去を思い出させ，かつて起こり永遠に失われてしまったことどもを追慕させる何か小さな断章をおそらく見出すでしょう」と述べている。つまり，モラエスが書いた『おヨネとコハル』という作品を読んで，読者が，そういえば自分にもこんなことがあったのだ，と思い出してもらうということ，それがここで述べられている「敬愛の文学」というものにつながるのだという捉えてよいであろう。

繰り返しになるが，ロマン主義の「遠いものへのあこがれ」，特に時間的に「遠いものへのあこがれ」として，ワーズワーズは幼年時代に目を向けた。そこには過去の「記憶」というものがあるのであり，後の時代のプルーストやイギリスのジェイムズ・ジョイス(James Joyce, 1882-1941)へと連なり，さらにモダニズムというものが登場してくる。そこで重要なのはやはり「記憶」というものであって，断片，断章という言葉がいわばキーワードのように登場する。T. S. エリオット(Thomas Stern Eliot, 1888-1965)の例えば「荒地」(*The Waste Land*, 1922)という詩では,「断片」や「断章」が鮮烈なイメージを読む者の脳裏に形象するのである。モラエスがどの程度そうした当時の文芸思潮の影響を受けていたのかは不明であるが，偶然にせよ必然にせよ，モラエスの書いた作品というものがそういう性格のものであるということは注目すべきである。

ここで「換喩」(metonymy)ということに触れておきたいが，換喩という言葉が今少し注目を浴びている。認知言語学の世界でも換喩ということが，言語の本質に関わるものとして最近よく話題になっている。換喩というものは，文章作法での修辞のひとつであるが，言葉そのものも「換喩」といってよいのである。言葉は，実体を表すいわばインデックスのようなもので，例えば,「机」といえば「机」という言葉によって実体の「机」を頭に思い浮かべるということになるのである。そういうのが言葉の本質的な機能としてあるわけで, そういう言葉が集成して，それを断章，断片として，あるいは印象，イメージとして介在させ，人間の中に潜む過去の「記憶」を蘇らせるということなのである。それをエリオットは,「客観的相関物」(objective correlative)という言葉で述べている。鮮烈なイメージを読者の脳裏に作り出すことによって，エリオットは，それによって共感を誘う思い出，過去の記憶を描き出そうとしたといえるだろう。

そういうことを，実はモラエスも「内的印象記」によって行おうとしたのではと考えられる。モラエスは 1913 年に徳島にやってきたが, その理由として「お前に追慕の念を抱かせるあの墓のそばに行け」(p.194)ということで，追慕の念を抱かせるもの，つまり「墓」が「換喩」となっているのである。目の前にある「墓」を見ればおヨネのことを，おヨネとの過去を思い出せる，そう捉えていいのではと考えられる。

４．モラエスと「庭」そして第５回内国勧業博覧会

モラエスは，おヨネが育った，そしておヨネの墓ができた「徳島」をどのように捉えていたのだろうか。その点については「庭」ということを手掛かりにしてみたい。モラエスは長屋住まいで，そこに小さな庭を作っていた。そこにいろんなものを植えて，モラエスは，この庭があればこそ，雑草を抜いたりして徳島で一番楽しい時間を過ごせるのだと書いている。彼にとってはそこが楽園のような世界になっていたのである。

「庭」の概念を少し振り返ってみると,「庭」というのは英語では「ガーデン」(garden)であり,「ガルド」は語源的に「取り囲む」という意味があって，つまりは庭というものは「囲まれた」空間ということになる。「庭」の歴史を辿ってみると大変興味深いが，また作庭の観点からいろんな種類のもの，例えば大まかにはいわゆる整形庭園とか自然庭園といったものがあるが，いずれにしても「庭」,「庭園」を作るということには，作る側の意識が反映されている。その「庭」というものがモラエスにとっては追慕の念，過去の記憶を呼び戻してくれる庭なのであって,「徳島」全体が彼にとっては「庭」のようなものではなかったのではと考えられる。そしておヨネ

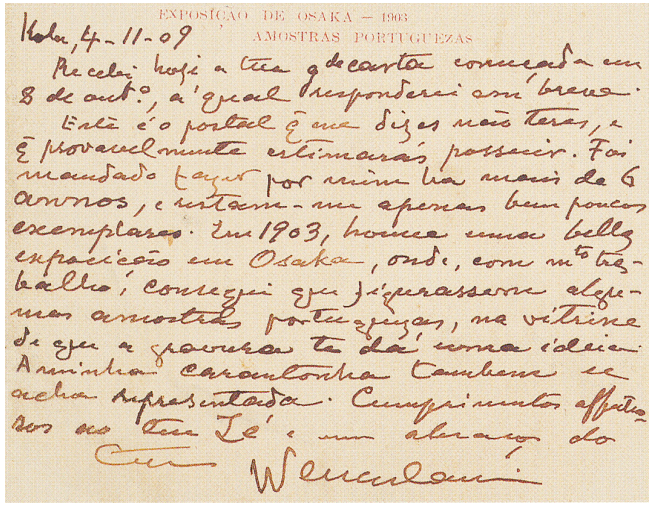
の思い出があちこちにある「徳島」というものはモラエスにとっては楽園的な世界ということになるが，「楽園」，つまり理想的な「庭」としてその概念の根底にあるのが「エデンの園」(The Garden of Eden)で，そこにはアダム(Adam)とイヴ(Eve)がいるということになる。それになぞえれば，アダムがモラエスで，イヴに相当するのがおヨネ，あるいはモラエスのとっての過去の他の女性（たち）ということになるかもしれない。いずれにしても，楽園的な世界には，過去の追憶が充満している世界なのである。

「庭園」は博覧会というものともひじょうに大きな関連性が持っている。「庭園」というものは，ほぼ楽園的な世界で，そこには作る者の意識が反映され，記憶が反映される，あるいはその時間意識が反映されているが，博覧会，正確に言えば博覧会会場の作り方にもそうした面を見ることができるのである。

1903 年に大阪市天王寺を第 1 会場，堺市大浜公園を第 2 会場として，第５回内国勧業博覧会が開かれたが，その博覧会にモラエスが精力的に関わりポルトガルのものを出品展示しているのである[8]。その第５回内国勧業博覧会には，外国のものも出品展示されており，実質日本で最初の万国博覧会であったし，今で言うところのテーマパークでもあった，大変な大きな博覧会であったといってもよかろう。下は神戸の領事時代のモラエスの絵葉書で，モラエスが博覧会会場のポルトガルの物産を展示したショーケースのそばで写っている写真である。

写真を見ると，ケースの中にワインの瓶とか罐詰とかが並べられているのが見える。この絵葉書にはポルトガル語で文章がしたためられており，以下がその文面でそれを英訳したものも添えておく[9]。

Produtos portugueses na Exposição de Osaka (1903).



[8] 第五回内国勧業博覧会については，平成 26 年 11 月 29 日，及び平成 26 年 12 月 15 日～平成 27 年 2 月 20 日まで開かれた徳島日本ポルトガル協会理事の近藤文子氏によるパネル展示「W. de Moraes の 5163 日」にも詳しく紹介されている。

[9] 英訳は，徳島大学で英語の非常勤講師をしているリカルド・パエス氏に依頼した。

Kobe 4-11-09

Today I received your great letter begun on October 8th, to which I will soon respond.
This is the postcard, I'm told, you don't have and which possession you will probably cherish. It was commissioned by me over six years and I have very few remaining copies.
In 1903, there was a fine exhibition in Osaka where, after much effort, I managed to have them showcase some Portuguese samples in the glass cabinet from which you can get an idea on the print. My ugly face is also found featured there.
Affectionate regards to your Zé and a hug from your Wenceslau.

その文面には「私の醜い顔」ということも書かれていて，モラエスがユーモアあふれた人物であったことのひとつの小さな証拠にもなっている。モラエスのユーモア精神についてはまた稿を改めて検討したい。

この第５回内国勧業博覧会については，インターネット上でも，大阪市立図書館，堺市立図書館，国立国会図書館などのデジタル・ライブラリーでも当時の写真でその様子を見ることができる。大変面白いもので，当時非常に賑やかで，また現代のものにひけを取らない珍しいイベントや注目を集める娯楽施設も用意された，大変大規模な博覧会であったことがわかる。

先にも触れたが，1851 年にロンドンで第１回万国博覧会が開かれており，そこには水晶宮，クリスタル・パレスが作られているが，今で言うところのいわゆるテーマ館に相当するだろう。博覧会が，ダーウィンの進化論と密接な関係があると述べたが，進化という考え方が，時間の意識，つまりは過去，現在，未来という直線的な時間の流れというものを意識させたわけであり，水晶宮は，それぞれ各国のテーマを集約しながら人類の輝かしい未来への時間を表すものであったといってよかろう。それぞれの展示館では，大体大まかには過去，現在，未来の意識の具体化ということで，必ずといってよいほど，過去はどうであったか，現在はこうである，そしてこう発展して未来はこうなるだろう，ということが展示物を配置しながら示されているのである。多種多様な展示館によって，様々な地域や国別にそれぞれの様子が展示されるのが通例であり，なかには人間の美人とかが展示された事もあったようである。それはまさに，人類の進化，さらには進化の考え方に潜んでいる優劣を視覚化しようとしたものに他ならないだろう。また当時日本では，絵葉書の流行というものがあったが，それもまさしく時間の意識そのものであり，その時の時間，瞬間を留めようとする意識の現れと考えていいだろう。

繰り返しになるが，庭園というものは，擬似的な楽園であって，そこには人間の意識の反映，記憶の反映，時間意識の反映がなされている。日本で開かれた第５回内国勧業博覧会というは，実質日本で最初の万国博覧会であり，実はテーマパークでもあったといわれている。ここでテーマパークというものに触れれば，今では USJ とか東京ディズニーランドとか，その他にもたくさんあるが，それを思い浮かべながら考えてみると，この四国という世界と重なりあってくる。四国には八十八箇所巡りというものがあるが，徳島が発心の道場，高知が修行の道場，愛媛が菩提の道場，そして香川が涅槃の道場ということになっている。これを札所の番号に従って順番に回るということを考えると，これは結構直線的な時間の流れというものに沿っていると考えることができる。

上図は東京ディズニーランドのマップであるが，四国の遍路の道場を重ねてみると非常に興味深い。門を入るとアドベンチャー・ランドがあり，そこでは人間と自然とが拮抗し合っていながらも自然の方が優勢である世界，次にはウェスタン・ランドで人間が自然に対して優勢となり，自然を開拓している世界となっている。そして人間と自然とが拮抗し合

う中で迷いというものが生じる，それがファンタジー・ランドということでゴースト・ハウス，幽霊の館の存在がある。そしてさらにその先にはトゥモロー・ランド，つまり未来の世界ということになっている。これを考えると，まさに四国と重なり合っていることがわかるのである。ひじょうに単純ではあるものの，要するに庭造りというもの，こういうテーマパークの作り方というものが，時間の流れというものと密接に関係しているということなのである。

モラエスの絵葉書書簡も，毎日のように書かれているが，これも時間を留めたい，記憶を留めたいということ，時間の温存ということであったろうと思われる。『徳島の盆踊り』は「随想記」ということで，日本の『方丈記』に惹かれてモラエスは作品を書いたと見なしてよいが，モラエスが意識していたかどうかは不明であるが，当時の 19 世紀から 20 世紀にかけての文芸思潮の大きな流れ，また当時のダーウィンの進化論で浮かび上がってくる時間の流れの意識，社会現象として博覧会というものが登場してくるが，それが「庭」，「庭園」というものの概念とひじょうに密接に関係していた，そういう大きな流れ，時代のうねりの中にあってモラエスは作品を書いたのではと考えられるのである。

参考文献：

アルマンド・マルチンス・ジャネイロ，野々山ミナ子・平野孝国訳『夜明けのしらべ―モラエス・人と作品』東京：五月書房，1969 年.

ヴェンセスラウ・デ・モラエス，岡村多希子訳『徳島の盆踊り』ことのは文庫，徳島：徳島県立文学書道館，2010 年.

――――．『おヨネとコハル』東京：彩流社，1989 年.

岡村多希子．『モラエスの旅―ポルトガル文人外交官』東京：彩流社，2000 年.

紀貫之．『土佐日記　貫之集』（新潮日本古典集成）東京：新潮社，1988 年.

ドナルド・キーン．『百代の過客―日記に見る日本人（上・下）』（朝日選書 259，260）東京：朝日新聞社，1987 年.

徳島県立図書館．『モラエス案内（増補再販）』徳島：徳島県立図書館，1995 年.

徳島県立文学書道館．『モラエス生誕 150 年・ハーン没後 100 年　モラエスとハーン展　東洋に魅せられた二人の西洋人』徳島：徳島県立文学書道館，2004 年.

花野富蔵．『日本人モラエス』東京：大空社，1995 年.

Moraes, Wenceslau José de Sousa. *O "Bon-odori„ em Tokushima (Caderno de impressões intimas).* PORTO:LIVRARIA MAGALHÃES & MONIZ, 1916.

――――．*Ó-Yoné e Ko-Haru*, EDIÇÃO DE A «RENASCENÇA PORTUGUESA», PORTO, 1923.